ISSN 0287-9654
昭和49年11月30日第3種郵便物認可　平成18年5月15日発行（毎月1回15日発行　通巻第389号）

21世紀の緑を考える
グリーン・エージ

2006/5

GREEN AGE

特集・里山の活性化に向けて

今日の課題・人と自然のふれあいを目指して／岡島成行
里山とは―里山の現状と課題／広木詔三　市民参加の里山作りと未来／中川重年
里山での環境学習のあり方／佐藤陽平　グリーンエッセイ・里山文化考／内山節
里山暮らしを楽しむ、里山クラブどんごろす／幸山昌生
「飲水資源」里山を守る森林塾青水／清水英毅

財団法人日本緑化センター

「GREEN AGE」'06/5

「飲水資源」里山を守る森林塾青水

り活かす

清　水　英　毅
（森林塾青水塾長）

1．発足の経緯ー森の勉強会から保全の実践へ

平成12年秋，地元の木工家・広川義直（現・当塾頭）とその仲間たちがサンワみどり基金「水源の森」（群馬県水上町藤原）に集った。家具等になる前の材木のことはよくわかっているが，森に生育する立木については名前さえ分からない。勉強しないと良い作品はできない，ということで産声をあげたのが森林塾青水。ルーペを持った木工家たちが始祖であった。

２年後の夏，見てほしい森があるという塾頭の呼びかけに応じて首都圏から有志数名が同じ藤原区上の原にある町有林（21ha＝元・入会（いりあい）地）に遊んだ。身の丈ほどもあるススキ草原（10ha）に分け入っては，これは面白い，ミズナラやカエデの雑木林（10ha）に踏み込んでは，これは素晴らしい，と一同大喜び。自然大好き派の「遊民」たちが仲間に加わったときだ。

東京に帰った彼等は，先人の知恵に学ぼうと，現代版「入会（いりあい）慣行」を考える集いをもった。その後も回を重ねるうちに，知的好奇心の強い「考動派」の仲間が増えてきた。

この間，塾頭の熱心な働きかけにより平成15年４月，この町有林を無償で借用する契約を交わすことになった。こうして根無草の「遊牧集団」が元・入会地という固有のフィールドを有する「農耕集団」に変身していった。

そして，同年秋，仲間数人でフィールドに隣接するスキー場のリフトに乗り展望台からススキ草原を見下ろした時のこと。それまで，広いと思っていたフィールドが意外にも狭く，猫の額ほどに感じられた。フィールドの向こうに某ホテルが経営するスキー場兼ゴルフ場が広がっていた。聞けば，かつてはその敷地を含め200ha余りが入会山としてのカヤ場だったという。しからば今残っている10haは希少価値。守らねば，というわけで森林塾青水は鳥の眼を持った活動家集団に変身していった。

2．フィールドの紹介ー特色など

我々は活動のフィールドを狭義のそれと広義のそれに区分，その上で密接不可分のものとして一体的に把えている。

狭義のそれは借用した町有林そのもの。広義のそれは町有林が属する藤原集落全体。町有林が長きにわたり地域の人々の入会地＝暮らしの場としての歴史を有するものであり，我々がこの集落全体を地域丸ごと博物館とする構想をもっているからである。

広義のフィールド＝藤原集落は標高700～1,150m，群馬県の最北端，利根川の源流域に位置する奥里山である。気象条件は新潟県南部又は福島県南西部に近く，名うての豪雪地帯であり又，それが故に首都圏の水ガメ＝生命の水のふる里でもある。人口は269戸，556人で４割弱が65歳以上。地元の藤原小・中学校の児童数は合わせて26名，昨年度の新一年生は実質ゼロであった。

最寄駅の新幹線「上毛高原」駅から日に数本の路線バスで１時間半弱，上越線「水上」駅からでも１

時間弱。地続きでありながら陸の孤島ともいうべき典型的過疎の地である。しかし，開発から見放されてきたが故に，手つかずの自然が残り，奥州藤原の落人伝説をはじめ数々の歴史と文化，そして日本人の心のふる里ともいうべき奥里山の原風景を色濃く残す集落でもある。

狭義のフィールド＝町有林（フィールド地図ご参照）は，その半分がススキ草原，残り半分がミズナラを中心とした広葉樹の二次林。中央を十郎太と呼ばれる源流の枝沢が流れており，年平均積雪量２ｍ，気温７～８℃で，谷川岳や武尊（ほたか）山を遠望する絶景の地にある。

特色は，①元・カヤ刈り場としての入会地であったこと，②今や，全国的にも希少となったススキ草原＝ヒョウモンモドキなど氷河期の生き残りとされる草原性生物の生息環境であること，③首都圏から３時間弱を要する過疎の地にありながら，フィールドの入口＝集合広場まで車で容易に行けること，などである。

３．活動方針一趣旨，目的など

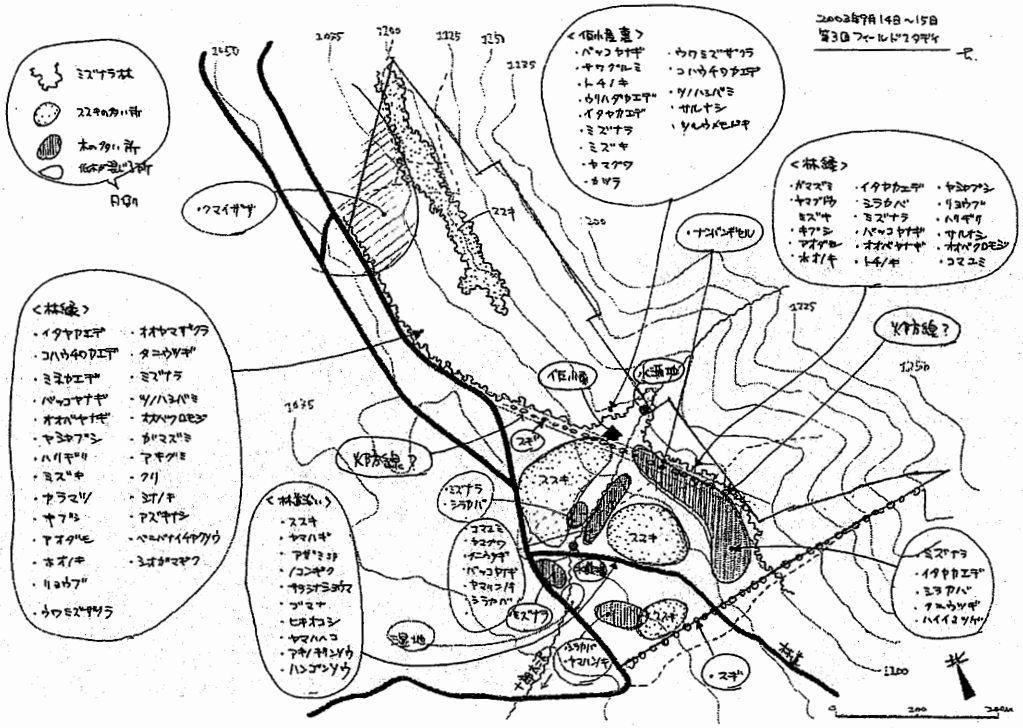
塾の合い言葉は「飲水思源」。会員・約70名の過半は首都圏在住で，その大方が利根川の水を生命の糧にしている。文字通り，水を飲めば源を思うべし。雨水とそれを育む奥里山，大自然の恵みに感謝し，先人が森や山との関わりを通じて培いきた知恵を見直し，継承しつつ新しい時代に活かしていきたい。そんな思い，心の持ち主の集りが森林塾である。

我々がめざすのは，①ススキ草原とミズナラ二次林の生物多様性の保全，活用，②現代版「入会慣行」＝新しい時代にふさわしい“里山のルール”を作ること，③森が育む水系＝流域の奥里山景観の保全・活用と，上・下流域住民の参画・交流による「地域丸ごと博物館」づくり，などである。

活動推進にあたってのモットーは“楽しみながら

町有林はススキ草原，カヤ刈り場

フィールド地図


ミズナラ林
ススキのカヤ刈り所
木のカヤ刈り所
低木が生じた所
日陰
クマイザサ
ススキ
ナンバンギセル
イタヤカエデ
ミズナラ
ミズキ
ヤマグワ
ホウ
ウワミズザクラ
コハウチワカエデ
ツノハシバミ
サルナシ
ツルウメモドキ
ガマズミ
ヤマブドウ
ミズキ
キブシ
アオダモ
ホオノキ
イタヤカエデ
ミヤマハバ
ミズナラ
バッコヤナギ
オオバヤナギ
トチノキ
ヤシャブシ
リョウブ
ハリギリ
サルナシ
オオバクロモジ
コマユミ
ススキ
ミズナラ
ヤマハギ
アザミ
ノコンギク
ヤマウツボ
ヒヨドリバナ
ヒヨオコシ
ヤマハハコ
アキノキリンソウ
ハンゴンソウ
ヤマハンノキ
スギ
ミズナラ
イタヤカエデ
ミヤマハバ
ヤマウツギ
ハイイヌツゲ
ススキ
スギ
ミズナラ
ススキ
ススキ
ススキ

良い汗をかく”。好きなことやって楽しむと同時に，それが「飲水思源」の実践につながり，少しでも地域の活性化に役立ちたい，地元の皆さんにも喜んでもらいたい，と思いつつ取り組んでいる。そして何よりも大切にしているのは地元の皆さんの気持ち。何をするにも，先ずは事前に相談し，指導をいただき，一緒になって進めていくことを，いつも念頭においている。

4．活動内容ー実績の報告

町有林の借用契約を機に本格化した過去３年間の活動実績を以下に要約してみる。

（１）フィールドの調査と整備計画の策定

○集落内の路上観察会と古老ヒアリング

○ススキ草原の植生調査，森林化調査

○ミズナラ二次林の毎木調査

○観察した野鳥，昆虫，植物の記録写真集「藤原の自然」（１～５）を作成

○遊歩道兼管理道の敷設を含むフィールド整備構想＝グランド・デザインの策定

（２）フィールドの整備と伝統復活

○カヤ刈り～古老の指導を仰ぎつつ共同実施。刈り取ったカヤは，国指定重要伝建の修復業者と話し合い，１ボッチ（５束）単位で買い上げてもらっている。長らく無用の長物化していたススキが有用材として活用される道が開かれた。

○野焼き～町当局と地元関係各位の理解と指導を得て，およそ40年ぶりに復活。火入れを実施したエリアのススキやワラビの生育ぶりは目に見えて改善した。

○雑木の除伐と管理道などの整備～ススキ草原が40年間，利用も管理もされなかった間に侵入したウツギ，シラカバなどの雑木を除伐（前述調査の結果，草原の森林化率は被覆面積で約20％であった）。また，カヤ刈りなどの作業の便と自然観察会や散策のための小径を計画，その半分を整備した。

○総合案内看板の設置～広場入口に，フィールドが元・入会地であったこと，現在は塾が町から借り受け利用と管理を委ねられている旨を標記した地図つき案内看板を設置。

○「山の口開け（くちあけ）」と「山の口終い（くちじまい）」行事の復活～毎年始めてフィールドに入る４月と最後となる11月に，いずれも地元・古老の先導により実施。作業の無事，安全と自然の恵みを祈り，感謝する古習の現代版。町の児童やお母さん達と一緒になってフィールド周辺のゴミ拾い大会も毎回，併催している。

（３）フィールドの活用

○麗澤中学校（柏市）１年生の「水源の森フィールド・スタディ」の受入れ～毎年７月，町当局からの依頼を受け，地元・藤原案内人クラブの皆さんと協働実施している。

○川越小学校５年生の林間学校「里山探険クラブ」の受入れ～上記と同様に受入れ。

○講座「コモンズ村ふじわら」の通年実施～町有林並びに集落をフィールドにした通年型・入会（いりあい）講座。（財）森林文化協会の企画協力と町当局の後援並び

ススキ草原の野焼き

カヤは１ボッチ単位で買上げられる

に藤原案内人クラブの支援を得て実施。野焼きやカヤ刈り作業を含む年７回のフィールドワーク実践講座。

（４）現代版「入会慣行」づくり

東京と藤原を往復しながら，入会慣行の学習会を数次にわたり開催。全国各地の事例を調べたり，英国のコモンズについて学んだりもした。また藤原ではどうだったのかと古老の皆さんに何度もヒアリングする機会をもち，ご教示いただいた。その中間成果を「入会地・入会慣行の今昔比較」並びに「上の原・ススキ草原の利用と管理の変遷」としてまとめた。

さらに，フィールドでの実践活動を通して考えた新しい入会慣行のあり方を，森林塾青水「入会山の約束事」（別表１）としてまとめてみた。いわば「現代版入会慣行」の初版である。今後，さらに大勢の方々に入り会っていただく中で，歳月をかけ版を重ねて練りあげていくつもりである。

（５）地域資源の活用調査事業

過疎の地にも磨けば光る玉があるはず。それを地域の宝として，どう活用すべきか。「緑と水の森林基金」の助成を受けつつ，１年にわたる地域資源調査を実施した結果を別表２（抜粋）のごとくまとめた。すでに，町当局ならびに地元に報告，提言済みで，平成18年度以降，当塾の活動の柱として順次実行に移していく予定である。

５．町ならびに集落との関わり

（１）町との関わり

○町有林の借用契約＝実態として，利用・管理を委ねられている。

○元・教職員住宅の借受け＝遊休化していた施設を現地事務所兼宿泊棟として利用中。

○麗澤中，川越小のフィールド・スタディの受託。

○グリーンツーリズム戦略推進委員としての活動＝塾生が町より任命を受け，塾のイベント開催のつど，藤原案内人クラブにガイド役を依頼するほか，すべて地元の民宿を利用，年間延６～700人の宿泊客を案内している。

○なによりも，塾の全ての活動につき町当局，特に観光商工課の協力的姿勢がありがたい。毎年一度，町長にも活動実績の報告と計画説明の機会を得ている。

（２）集落との関わり

○藤原区に対し「特別区費」の納付。集落の通行権というか，フィールドの入会権の見合いのごときもの，と心得ている。

○藤原区民祭りに対する協賛金の納付。

○藤原案内人クラブの積極的利用（前述）。

○新設「遊山館」（地元の肝煎りで，将来の地域丸ごと博物館のコア施設としてオープンした建物）の活用策提案と積極的利用。

○なにをするにも合議～野焼き，カヤ刈り他なにをするにもすべて，事前に地元・古老の皆さんと相談

フィールドの総合案内板

「山の口終い」の行事

の上，協働実施。“上の原・ススキ草原管理委員会”的なものが自ずと形成されつつある。これが一番うれしい，ありがたい。

6．今後の事業方針と課題

（1）活動の方向性ー開放と連携

○従来通り，地元ならびに町当局との連携を密にすることに加え，今後は会員以外にも活動の輪を拡げていきたい。特に，利根川下流域＝首都圏在住の団塊の世代を対象に“あなたのふる里つくりませんか”キャンペーンをアピールしてみたい。具体的には，野焼きなどのフィールド整備作業の他，集落内の古道の復活など，息の長いプログラムへの参加呼びかけ。その際，森づくりフォーラム（東京）やふるさと回帰支援センターなど有力団体と連携，その力を借りて推進していきたい。

集落内の古道復活，青木沢峠

○これを受け，平成18年度より講座「コモンズ村ふじわら」のメインテーマをフットパス作りとし，木馬道（きんまみち）や峠越えの古道を整備することを計画中である。この実践活動を通して，より多くの人々が流域の都市部から集落に通い，出入りすることとなり，自ずと新しい入会い＝日本版コモンズが形成されていくものと期待している。

（2）今後の課題ー持続的発展のために

○活動の担い手の確保～活動進展にともない，仕事をもちながらボランタリーでこなす事務局の仕事はもはや限界，パンク寸前。また地元に腰を落ちつけて，集落―町当局ー当塾のパイプ役となり得る中核

別表1

現代版「入会慣行」の考え方～枠組み

森林塾青水「入会山」の約束事
ー新しい里山の掟としての現代版「入会慣行」ー

●みんなでかかわりながら
●時間をかけ歳月を重ねて
●練り上げ作り上げていく

2004年3月24日初版

約束ごとの対象～範囲		R 権利（やってよい事～便益）	D 義務 ※4（なすべき事～禁止事項）			D-1 なすべき事（管理する） 必ず ～ 最低	D-1 なすべき事（管理する） 望ましい～出来たら	D-2 してはいけない事（禁止事項）	P 罰則
フィールドI（狭義）	契約管理地 ※1	入会権（利用する）※3	○フィールド内、立ち入り、利用 ー散策、観察、教育、憩い ー回が、俳句など文化活動、他	目指すは、理想のコモンズ＝共有財産の wise & sustainable use	現代版「入会慣行」の普及・啓発活動	●携帯灰皿持参	○携帯トイレ持参	●ゴミ,ｶﾞﾗｺのポイ捨て	罰金 重荷
	・自然生態系		○茅刈り、山菜、きのこ採取			●ゴミ持ち帰り	○マイ箸、マイカップ持参	●野糞	
	・管理道		○湧水汲み取り			●清掃活動（2回/年）参加 ー山の口開けと終いの日ー	○ゴミ拾得用袋の携行	●水源に負荷を与え、汚す行為	
	・景観、等					●資源別禁止期間内の採取持ち帰り ※7 （茅、萩、山菜、茸など）	○茅刈り、野焼き参加	●焚き火	
フィールドII（広義）	地元・集落 ※2		○地元民宿の優先予約			共有財産＝コモンズ	○管理道、水汲み場、水源等のフィールド整備作業参加	●山菜・茸の取り尽くし	一時的権利取上
	・水上町・行政		○地元民宿の割引利用			●藤原区費の納入 （塾として3万円／年会費より充当）	としての認識・行動	●希少植物の採取※9（ﾅﾝﾊﾞﾝｾﾋﾞﾗ,ｵﾐﾅｴｼ,等）	
	・藤原区		○地元民宿による森林塾食事メニューの提供			●地元民宿利用	○地元物産・お土産の購入	●ペット、外来動植物の持ち込み、放置	
	・地元住民・民家		○藤原案内人クラブの優先予約			●あいさつ励行	○地元の郷土館・集古館等の積極利用	●放歌高吟	
	・くらし・文化						○地元祭礼・イベントへの参加と交流	●立ち小便	
	・技術・産業							●のぞき見	
								●騒音を出す行為	退会 出入り禁止
・塾内組織・活動		○塾主催オリジナルプログラムの優先予約				合い言葉「飲水思源」の啓蒙実践 ※5			
・会員相互・交流		○塾主催オリジナルプログラム参加費無料				●入会金(10千円) 年会費(5千円)	○事務局補佐	●会則違反 その他これに準ずる行為	
・会員規約		○関連情報・資料の優先提供、他				●総会出席（年1回委任状可）	○イベント・プログラム支援		
						●フィールドIのグランドデザインの理解と実行支援 （ゾーニング別管理方針、資源活用、等）※8			

残してよいのは思い出と足跡だけ ※6

（軽）→（重）

※1）水上町大字藤原の元入会地であった町有林21ha（）
（半分はススキ草原、残りはミズナラ林，共有地・共有財産＝コモンズとして当塾が借り上げ責任管理中）
※2）主として藤原中区の集落群（将来の地域丸ごと博物館対象地域）
※3）入会権は会員のみならず，地元住民ならびに従前よりフィールドIを利用していた人々も
「入会慣行」期守を前提にこれを有するものとする
※4）※3の権利は義務を怠たした者にのみ与えられるものとする
※5）水とそれを育む自然に感謝し，大切に利用する心と行動
※6）「とっていいのは写真だけ」とは一線を画す
※7）資源の種類毎に採取可能期間を別に定める
※8・※9）別に定める

別表 2

■みなかみ町藤原地区の地域資源活用調査　展開事例

平成 17 年 8 月森林塾青水

■団塊の世代の皆さまへ
"あなたのふる里" つくりませんか!! キャンペーン
―首都圏の水瓶にすばらしいフィールドを用意しました
―ライフワークとして楽しみながら良い汗をかく
―そして、新しい出会いとときめき、感動体験

■どんなフィールド
日本人の心の原風景
・生命の水＝清流のふる里
（ﾎﾀﾙ、ﾓﾘｱｵｶﾞｴﾙ、ｻﾝｼｮｳｳｵ、ｲﾜﾅ、他）
・きらめく星のふる里
・神々の信仰のふる里
（十二様、他）
・ロマンと伝説のふる里
・氷河期の草原性生物のふる里
（蝶、トンボ、邯鄲、他）
・元カヤ場を含む入会地
・「野焼き・茅かり」風物誌の里
・豪雪と保存食文化の里
・伝統芸能・工芸の里
日本の里地里山 30 保全活動ｺﾝﾃｽﾄ

■どんな事をやるの？
―４つのプログラム―
地域丸ごと博物館づくり
（エコミュージアム）
①藤原・お宝発見隊
―藤原ガイドマップづくり
②ススキ草原/森林再生ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
―新しいカヤ場/現代版入会慣行
③茅葺屋の葺き替えﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
―諏訪神社、地元古民家、雲越家住宅
④上州浪漫街道作りﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
―古道探訪・普請/ﾌｯﾄﾊﾟｽ作り（寺山街道、青木沢峠、芦の田峠、他）武尊山用遊歩道

■目指すゴール＝共通の目標は
●日本一の地域丸ごと博物館＝現代の入会山
『森林コモンズ村・ふじわら』づくり
●生命の水の源の地に "みんなのふる里" をつくります

■どんな事をどんな仕組みで？
―主に４つのプログラムに 2006 年から５～10 年かけて取り組みます
―参画・協働・体験・交流型で展開します
―お好きなプログラムにいくつでも参加いただけます

■私たちがお手伝いします
●推進体制
「森林コモンズ村ふじわら」建設委員会
（「上の原の森」管理委員会）
―― 森林塾青水/みなかみ町/地元・藤原区 ――
●パートナー
― 田園整備構想促進委員会、藤原案内人クラブ
― 民宿組合、藤原小学校・中学校
― 利根川上下流連携支援センター
●協力・協賛（候補）
― ＴＲ東日本、ＪＴＢ、関越バス、京王バス
― 日本ウォーキング協会、日本レクレーション協会
― 群馬県、環境省、林野庁、国交省

■どんな意味があるの？
―社会的意義/自己充足―
・水源森の保全（ｴｺﾄﾚｰﾙ、ｾﾗﾋﾟｰﾛｰﾄﾞ、ﾌｯﾄﾊﾟｽ）
・奥里山の景観・風物誌づくり
・やりがい/生きがい/ときめき・憩い/癒し/やすらぎ
・自然ふれあい環境学習の場・機会の提供

■モットーは　・楽しみながら良い汗をかく
・参画・協働・体験・交流
・オールシーズン型/滞在型/リピート型
■合言葉　＝「飲水思源」・自然の恵みに感謝
・自然／仲間との共生き
・先人の知恵を大切に継承

的人材も必須。地域丸ごと博物館という長期構想実現のためには，この二つの機能を担う中核的若手人材の育成，確保が急務。

○参加者の経済的負担の軽減～遠隔の地にあるフィールドへの足廻り確保と交通費，宿泊費の節減。通年・反復・通い型の活動を継続する上での宿命的問題であり，関係各位のお知恵とお力を是非お借りしたい。

○滞在型の施設・ソフトの整備～通年・反復かつ滞在型の参加者のニーズに応え得る受入施設とソフトプログラムの整備，開発。地元，行政と一体となってじっくり取組むべき課題と認識している。

ホームページ：http：//commonf.net

E-mail：sinrinjyuku@fiberbit.net

●図書案内

元気な森の作り方

本書のサブタイトルに「材質に影響を与える林木の被害とその対策」とあるように，材質に影響を与える腐朽，変色，ゆがみ，亀裂などがどのように発生したか，その診断法，対策を解説したものである。材質の劣化から「元気な森の作り方」に光りをあてた本書は林業関係者，緑化関係者にとって参考となるだろう。

本書は①森林の生態系と材の形成原理，②森林作業と材質，③病気による害，④動物による害，⑤昆虫による害，⑥気象による害，⑦森林作業による害，⑧樹木に潜んでいる欠点，⑨保育方法の違いによる材質変化の９章からなる。

なお，本書の執筆は（独）森林総合研究所の研究者を中心に各県の林業試験場の研究者27名がそれぞれの項目ごとにわかりやすく解説した。

Ａ５版　247頁　定価3,000円（消費税含）

日本緑化センター／電話 03-3585-3561